

# 春の寝顔

戸外はあにか  
聲もあく降りつもり  
時折ページを繰るやうな音は  
屋根を這る雪であらう

妾は友への手紙を書き終へて  
炬燵に疲れた頸を伏せ  
ちつと深い夜を聴いてゐる  
心は恍惚と何かに誘はれる

橋

爪

健

雪に閉しまされた冬の向むかふに

白しろ統ゆめの帷まきを隔へだてゝ

ほの明あるく眠ねつてゐる世界

かすかお寢息ねいきさへきゝとれる

妾わがしがその透ときとほる帷まきから覗のぞいても

おゝ、そこに寢ねてゐる美うつくしい天女あまのむすめは

黎明れいめいの花はなのやうな臉おもてを揺ゆりもせず

間まもなく醒さめる夢ゆめをば見みてゐるやう

戸外とがいには雪ゆきの精まことであらう

見知みちらぬ人の訪まじひのやうに

時折ときとき慎しんまじいノックノックをしては

まだ氣配けいはい静しずかにイいんでゐる